



TITLE:

京大東アジアセンターニューズレター 第469号

AUTHOR(S):

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター

CITATION:

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター. 京大東アジアセンターニューズレター 第469号. 京大東アジアセンターニューズレター 2013, 469

ISSUE DATE:

2013-05-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/174101>

RIGHT:

目次

- シンポジウム「転換期のアジア資本主義—豊かなアジアに向かって」のお知らせ
- アジア中古車流通研究会のお知らせ
- ミャンマー関係 映画鑑賞案内
- カンボジア短信 : 2013-No.8 (4月下旬~5月上旬)
- 【中国経済最新統計】

主催
京都大学東アジア経済研究センター

後援
京都大学東アジア経済研究センター協力会

シンポジウム 転換期のアジア資本主義—豊かなアジアに向かって

2013 年 7 月 13 日(土) 13 時 30 分

京都大学時計台記念館 2 階国際交流ホール

今日、多くのアジア諸国は自国の低廉な労働力と先進国の資本と技術に基づく輸出主導型成長の段階を脱しつつある。そして新たな成長段階は国民の所得上昇に基づく内需の成長や技術能力の形成によって特徴づけられる。本シンポジウムでは次の三つの異なる切り口の報告に基づいて、アジアで現在進行中のこの経済構造の大転換について、議論したい。平川均氏はこの転換を NIEs 段階から PoBMEs(Potentially Bigger Market Economies)段階への移行ととらえて、全体的見取図を提示する。徳丸宜穂氏はインドの IT 企業内部の変化に着目して、産業高度化の現状を報告する。厳成男氏は制度的視点から、輸出主導型から内需主導型への転換を成功させるにはどのような制度が必要かについて述べる。

司会 京都大学大学院経済学研究科 教授 宇仁宏幸

13:30-13:40

挨拶: 京都大学大学院経済学研究科 研究科長 教授 植田和弘

13:40-14:40

国士舘大学 21 世紀アジア学部 教授 平川 均

「世界経済の構造転換—NIEs 段階から PoBMEs 段階へ」

14:40-15:40

名古屋工業大学工学研究科 准教授 徳丸 宜穂

「インド IT 産業の高度化と知識・人材管理」

15:40-16:40

新潟大学経済学部 准教授 巖 成男

「中国の内需主導型成長への転換は可能か」

16 : 40-16:45

閉会挨拶

17:00-18:30

懇親会 於時計台記念館 2 階国際交流ホール

司会 大和ハウス工業株式会社顧問/東アジア経済研究センター協力会理事 河合司二

開会挨拶 京都大学大学院経済学研究科教授/東アジア経済研究センター長 塩地 洋

●参加希望者は宇仁 (uni@econ.kyoto-u.ac.jp) まで御連絡ください。なお懇親会参加費は 2000 円 (協力会会員は無料)。

第 5 回 アジア中古車流通研究会

主催：京都大学東アジア経済研究センター

後援：京都大学東アジア経済研究センター協力会

2013 年 5 月 25 日(土) 13 時

於 京都大学経済学部 みずほホール (法経東館地下 1 階)

司会 大阪商業大学 教授 孫飛舟

1. 挨拶

13:00-13:10

□京都大学東アジア経済研究センター/同協力会

2. 短発話

13:10-13:30

□孫飛舟(大阪商業大学)

中国のナンバー規制は中古車需要を押し上げる

3. 報告

13:30-16:15

□三嶋恒平 (慶應大学)

ミャンマーのオートバイ事情

□松岡憲司 (龍谷大学)

ミャンマーの産業について一投資環境と中小企業を中心に一

□富山栄子 (事業創造大学院大学)

ミャンマー自動車市場を訪れて

□木村将裕 (住友商事)

ミャンマーの金融事情と販売金融現況

□山本肇 (鹿児島県立短期大学)

ミャンマーの自動車産業-政策、発展史、今後の展望

□塩地洋 (京都大学)

ミャンマー自動車流通調査から見えてきたこと

4. ディスカッション

16:15-17:00

□ミャンマー進出企業

□質疑応答

終了後 懇親会 (写楽 百万遍から北 100mを西へ 075-781-1335)

研究会、懇親会ともに出欠はとりません。事前連絡の必要はありません。

なおこの研究会は京都大学東アジア経済研究センター協会の法人会員・個人会員のみが参加できるクローズドな研究会です。非会員で参加希望の方は塩地 shioji@econ.kyoto-u.ac.jp まで協力会への入会手続きをお問い合わせください。

ミャンマー関係 映画鑑賞案内

14. MAY. 13

中小企業家同友会アジア情報センター代表

東アジアセンター外部研究員(協力会理事)

小島正憲

《 邦画 》

1. 「異国に生きる 日本の中のビルマ人」
2. 「ビルマの堅琴」 1956年版・1985年版
3. 「花と兵隊」
4. 「血の絆」(未鑑賞)

《 洋画 》

5. 「ビルマVJ 消された革命」
6. 「ビルマ、パゴダの影で」
7. 「ラングーンを越えて」
8. 再掲載 「The Lady アウンサンスーチー 引き裂かれた愛」

1. 「異国に生きる 日本の中のビルマ人」 監修:土井敏邦

この映画は、「誰のために、何のために、遠い“異国”で生きるのか。自分には何がいちばん大切なのか— 東京で暮らすビルマ人青年の14年間の記録」である。なおこの映画は、スー・チー氏の来日に合わせて、先日まで東京の東中野の映画館で上映されていた。引き続き大阪・名古屋でも上映される予定である。

この映画では、ビルマ人青年チョウチョウソーの生活が淡々と描かれているだけで、娯楽性が少ない。したがってビルマ自体に興味のない人にとっては、若干、退屈なものとなっている。しかしながら、それだけに誇張もなく、チョウチョウソー青年の「日本滞在はすでに20年以上になり、暮らしも安定した。しかしそこはチョウにとって将来の保障もなく、祖国に貢献する役割も担えない“異国”であり、“自分の居場所”ではない。“家族に会いたい”、“祖国で暮らしたい”という願いと、“祖国の民主化運動”のためにその望郷の想いを捨てなければならないという思い。その狭間で揺れ動いてきたチョウは今の祖国の“民主化”をどう捉え、その中でどう生きようとするのか」という苦悩が伝わってくる作品である。

私はビルマの民主化運動のために戦い、そして日本に政治亡命してきたチョウ青年の生き方について、あれこれと論評をするつもりはない。しかし映画観賞中にもかかわらず、私の頭の中に、「同じく民主化運動に奔走し、軍部の迫害を逃れ、少数民族地域に逃げ込んだ学生たちの一部は、やがて内部粛清という悲劇的な結末を迎えている。もしチョウ青年が日本への政治亡命という道を選択しないで、ビルマの辺境に身を置いていた場合、彼の運命はどうなっていたのだろうか」との思いが、日本赤軍との比較で、たびたび浮かび上がってきたということを、ここに記しておく。

映画の中には、チョウ青年同様に政治亡命してきたビルマ人青年が、日本の入管で冷遇される場面が出てくる。確かに日本の入管については、ビルマ人だけでなく、外国人一般からも評判があまり良くない。しかし私には、ミャンマーで工場を作り始めたときに、技術を取得させるために日本の本社に送り込んでいたミャンマー人の現地社員が、ある日、突然蒸発してしまい、たいへん困った経験がある。しばらく後に、彼は東京の飲食店で働いているらしいという情報が入ったが、居場所を特定するまでには至らなかった。もちろん彼は不法滞在である。このようなミャンマー人が日本に、多数居ることも事実であり、それらを厳しく取り締まる入管の態度が、ミャンマー人の眼に冷遇と映っても、それは致し方がないことだと、私は思う。

2. 「ビルマの堅琴」 監督:市川崑 1956年版＝白黒映画 1985年版＝カラー映画

この物語と映画は年配の日本人の間では、知らぬ人がいないぐらい有名である。したがって解説や論評の必要はまったくなかった。それでも私は、巨匠市川崑監督が、「なぜ映画を撮り直したか」が知りたかったので、新版と旧版を見比べてみた。そこでわかったのは、この映画の場合やはりカラーの方が、市川監督の訴えたいことが、鑑賞者によく伝わるのではないかとということである。私は、「旧版の方では映画の冒頭と終了時点で、“ビルマの土はあかい 岩もあかい”という字幕が出てくるが、新版では終了時点のみで冒頭の部分にはない。つまり市川監督は、“ビルマの土はあかい”ということが白黒では表現できないため、やむを得ずその名文句を繰り返して使ったのではないだろうか」と思う。また私は、市川監督は“ビルマの土はあかい 岩もまたあかい”という表現で、ビルマ戦線で死んだ多くの日本兵の姿を印象付け、社会に反戦思想を広く訴えたかったのだと思う。実際には“ビルマの土はあかい”が、“岩はあかくない”。市川監督は岩があかくなるほど、多くの日本兵の血が流されたということが伝えたかったのではないかと。

それには、カラー映画の方が絶対に有利である、私と思う。

市川監督は、旧版ではミャンマー現地で撮影に限界があり、その点に不満が残っていたため、撮り直したとも言われている。たしかに旧版は主人公の水島上等兵の心境の変化の説明的な描写が多く、鑑賞者に理解しやすいようにしてある。それに対して新版は現地で撮影が多く、カラー映像の流れの中で、鑑賞者が自然にわかるような描写になっている。

従来から原作の「ビルマの堅琴」については、「ビルマの僧侶は歌舞音曲の類を嗜むことを禁忌としているので、僧侶となった水島上等兵が堅琴を弾くというストーリーには無理がある」という指摘がある。しかし私は、「水島上等兵は僧侶に扮していただけであり、実際には僧侶ではないのだから堅琴を弾いてもおかしくはない」と考える。しかも日本に帰還する戦友たちと別れて、ビルマに残って僧侶となって戦死した日本兵を弔っていくときには、堅琴は弾いてはいない。したがって、その批判は当たらないと思う。また小隊長が指揮する「埴生の宿」などの合唱が、幾度となくこの小隊の危地を救う場面が出てくるが、これにも、実際に弾の飛び交う戦場で、合唱が効果があるかどうかについて、疑問が呈されている。この点については私にはよくわからない。

なお小隊長役は旧版では三国連太郎が、新版では石坂浩二が演じているが、音楽学校出という設定なので、体育会系の三国よりも若干ひ弱な感じがする文化サークル系の石坂の方が、適役だと思った。また水島上等兵役も、安井昌二よりも中井貴一の方が性格の繊細な感じが出ており、これも新版の方がよいと思った。収容所に来るビルマのお婆さん役は、旧・新版ともに北林谷栄が演じているが、30年の歳月が北林の演技に円熟味を加えており、これも新版に軍配が上がる。

3. 「花と兵隊」 監督:松林要樹

この映画は、「太平洋戦争中に、タイ・ビルマ国境付近で敗戦を迎えた後、祖国に還らなかった6名の日本兵、すなわち“未帰還兵”を描いた」ドキュメンタリーである。敗戦から60年余を経て、戦争の記憶が薄れつつある今、日本では憲法を改正し再軍備を肯定する風潮がのさばり始めている。この時期に、敗戦後、自らの意志であるとはいえ、所属部隊を離れ、現地に残り、壮絶な人生を歩んだ未帰還兵たちのその理由や生き様を知ることが、飽食と平和ボケの現代社会に生きる日本人にとって、きわめて大切なことである。その意味で、この映画は貴重な一作である。

4. 未鑑賞「血の絆」 監督:千野皓司

「血の絆」の原作は、1973年にビルマで出版された「THWAY」であり、当時ビルマではベストセラーになったという。日本兵とミャンマー人女性との間に生まれた男の子を探して、その日本兵が復員してから15年ほど後に、父の遺志を継いだ姉が日本からビルマのマングレーまで旅をして、苦難の末、わだかまりを持つ弟と再会する物語である。当時のビルマでは劇映画の撮影は許可されていなかったが、千野監督は多くの困難を乗り越え、その大部分をミャンマーロケで行ったという。残念ながらこの映画は、8年ほど前に、2度ほど公開されただけでお蔵入りとなってしまったようである。劇場で一般公開しても採算が取れないという判断だったのだろう。ぜひ見てみたい作品ではある。

5. 「ビルマ VJ 消された革命」 原案・脚本:ヤン・クログスガード

VJとはビデオ・ジャーナリストのことである。この映画は全編が、VJたちが決死の覚悟で撮った「ビルマの2007年の反政府デモ」の記録である。もちろんビデオカメラを片手に銃弾に倒れた日本人ジャーナリスト長井健司氏の姿も克明に記録されている。2010年5月に劇場公開されたとき、その宣伝文句には、「一刻も早く観て欲しい。世界中のなるべく多くの人の目に触れることが、命がけで報道する彼らVJのその命を守ることにつながる」との文字が書かれており、刺激的だった。それから3年、今、ミャンマーでは民主化がじょじょに進展し、その緊迫感は薄れてきている。しかし今だからこそ、当時の状況を冷静に見直して見る必要があるのではないだろうか。その意味で、本映画は歴史の生き証人としても貴重な一作である。

6. 「ビルマ、パゴダの影で」 監督:アイリス・マーティ

この映画も軍政時代のビルマの、「軍事政権に圧迫されたため村々を追われ、時に焼き討ちや暴行に遭い、山々の中のジャングルを逃げ回る主に少数民族からなる国内避難民たちや、彼らの最終的な行き先である陸の国境を越えたタイ側のキャンプに住む難民たちの深刻な現実」を描きだした貴重なドキュメンタリー作品である。アイリス監督はスイスの観光用PR番組の撮影と偽り、ビルマのジャングルの奥深くまで潜入し、迫害されている少数民族の証言を必死の覚悟で撮っている。しかし残念ながらそのインパクトは上掲作よりも若干劣る。

7. 「ラングーンを越えて」 監督:ジョン・ブアマン

この映画は、偶然、観光旅行先のビルマで、1988年の激動に巻き込まれた米国人女性を描いたものである。上掲2作のようなノンフィクションものではないが、実話を元にしていてというだけあって、現実性のあるストーリーであり、1988年当時のビルマを知るには、好適な映画であると思う。

主人公の米国人女性は、夫と子どもを亡くし、その傷心を癒すために姉といっしょに観光旅行で、ビルマを訪ねる。

しかしそこで、パスポートを紛失したことから出国が遅れ、他の旅行者と離れ単独でヤンゴンに留まることになる。その間に民主化を要求する学生のデモが、ヤンゴンの市街を埋め尽くすことになり、また彼女は軍隊の血の弾圧を目の当たりにすることになる。偶然に知り合った男性が軍から追われる身であったため、彼女自身もタイ領に逃げ込むまで、多くのビルマ人と共に逃げ惑うことになる。その決死の逃避行は見応えがある。

8. 再掲載 「The Lady アウンサンスーチー 引き裂かれた愛」

29. AUG. 12

主演:ミシェル・ヨー 監督:リュック・ベッソン 仏制作

小島正憲

ご存知の人も多いと思うが、アウンサンスーチー氏の激動の半生を描いた映画が、現在、全国一斉放映中である。

まさに今、ビルマは民主化の真っ最中である。アウンサンスーチー氏はその渦中で、ビルマ人民の期待を、その華奢な身体で一心に受け止め、身の危険を怖れず、一步も退かない気概で、軍事政権と対峙している。軍事政権側は一定の譲歩を見せているが、緊迫した状況が続いており、いつ何時、歯車が逆回転し始めるか、わからない。ビルマでは、アウンサンスーチー氏の、1988年以来の身を挺しての25年間の闘いが、現在も続いているのである。

この映画は、この25年間のアウンサンスーチー氏の闘いを紹介したものである。多くの見終わった観客は自宅に帰り、この映画の続編として、現実のアウンサンスーチー氏の姿を、すぐにテレビで見ることができよう。そしてそのとき、多くの人びとの頭の中には、即座に過去25年間のアウンサンスーチー氏の闘いの姿が、くっきりと浮かび上がることだろう。その意味でこの映画の作製と放映は、まさに絶好のタイミングだったといえよう。私も、数日前に、やっこの映画を鑑賞することができ、多くの観客の仲間入りができた。

実際に、この映画が2010年にクランクアップしようとしていたころ、スーチー氏が11月13日に自宅軟禁から解放されるというニュースが、映画のスタッフやキャストたちにもたらされた。そのとき彼らはテレビの生中継で、スーチー氏の自宅の周囲に張りめぐらされたバリケードや壁の上の有刺鉄線が取り除かれるのを、食い入るようにみつめ、スーチー氏が解放される瞬間を目にして頬に涙した。なぜなら奇しくも、スタッフやキャストたちは、前日に1995年の1度目の開放シーンを撮影していたからである。現実がフィクションと重なって、スーチー氏が髪に花を挿して堂々とした足取りで門に歩いて行く。前日に撮った主演女優のミシェルと全く同じだった。そのときのミシェルは、「私たち全員にとって大興奮の一瞬だった」と言い、監督のベッソンは、「自分が撮影した映像を誰かに盗まれたような気がした」と語っている。

もともとこの映画は、現在のようなビルマの民主化の進展を想定したものではない。2007年、女優のミシェル・ヨーがアウンサンスーチー氏を描いたレベッカ・フレインの脚本を読み、それに感動し自分が演じることを決意した後、監督のリュック・ベッソンに映画化を持ちかけたものだという。その後、ミシェル・ヨーはスーチー氏自身の200時間にも及ぶ映像を入手し、それを見て役作りに励み、同時にビルマ語をマスターするなどの努力を積み重ねたという。私は1997年に、実際に、自宅前で演説するスーチー氏を見たことがあるが、美しく、凛乎とした気迫を備えた女性であった。今回の主演女優ミシェル・ヨーは、まさにその容姿とともに、完璧にスーチー氏に成り切っている。

この映画で、私がもっとも感動し場面は、アウンサンスーチー氏が遊説中に、軍の兵士たちに銃口を向けられたとき、まず仲間を退かせ、その後単身で、毅然として兵士たちに近づいて行くシーンである。映画の中では、このスーチー氏の凛乎たる姿に、父親アウンサンの狙撃場面を重ね合わせ、観客にスーチー氏に父親同様の結末が襲うことを予感させている。このような状況を、まさに一触即発というのだろう。実際に、スーチー氏は、このとき死を覚悟したに違いない。それでもスーチー氏は、一步もたじろがず、兵士たちに近づき、その銃列の間をすり抜けて行った。まさに、英雄誕生の一瞬である。まさに、リーダー誕生の一瞬である。

スーチー氏は現在に至るまでも、非暴力主義を貫いている。私は、これを全面的に支持する。スーチー氏のこの思想と行動は、ノーベル平和賞の受賞に十分に値する。暴力の応酬は、暴力の連鎖を生み、とどまることがない。どんなことがあっても、暴力を用いて相手を屈伏させるような手段は用いるべきではない。しかし現在でも、ビルマでは諸民族間で武力闘争が行われている。ビルマが民主化され、スーチー氏がビルマのリーダーになったとき、この問題は非暴力主義を掲げてきた彼女の肩に大きくのしかかるだろう。そのような環境で、スーチー氏が世界に先駆けて、民族紛争の模範的解決方法を見出すことを、私は期待する。

この映画で気になった点は、ビルマ独立に至るアウンサン将軍の歩みが一切紹介されていないことである。この映画はアウンサン将軍の暗殺シーンから始まっているが、暗殺者の集団の正体とその目的は観客にはまったくわからない。ましてやアウンサン将軍と日本との深い関係は、まったく描写されていない。さらにビルマに対する英国や英国軍の位置づけなども映しだれていない。これらの歴史的関係を要領よくまとめて描写していれば、スーチー氏が自宅軟禁から開放されるに至った経過で、日本政府が果たした役割を、観客がもっとよく理解できたのではないかと思う。もっともこの映画が、欧米の観客を主な相手に想定して作製されたものと考えれば、東洋の小国に花を持たせることなどは、ベッソン監督の眼中にはまったくなかったと考えるのが妥当であろう。

私は単純なので、この映画を見て改めてスーチーファンになった。多くの日本人にぜひとも見て欲しい一作である。

以上

1. 労働者たちの昼食事情



プノンペン経済特区入り口にある中華レストラン。そこには、労働者の1ヶ月分の給与を要する料理が名を連ねている。フカヒレスープが78ドル、アワビと海鮮鍋が88ドルなど。このレストランのアシスタントマネージャーの Neak Sopheaさんは、「お客様はほぼ外国人で、その中でも中国人が特に多い」と話している。

その一方、写真はプノンペン経済特区のとある工場外の光景。袋詰されたカレーは一袋1,000リエル(約25円)で売られている。ここで露天商がカレーを売るために、工場から権利を買い商いしている。Thy Bun Thoeunさんは、Evergreen Industrial garment社の横にある広場で、昼食を頼張る労働者の1人である。「これらの食べ物、家で作られここまで持って来て売られている。衛生面には問題があるとは思いますが、私には他に選択肢はありません。ここで毎日500リエルから1,000リエルを昼食代として費やしています」と話した。そして、午後の腹痛と、嘔吐感には珍しい事ではないと言う。5月から最低賃金が75ドルに上がり、以前より14ドルの上昇となるが、彼女は「毎回自炊する時間の余裕がない」と話す。一方、労働者グループのAmerican Center for International Labor Solidarity(ACILS)は、「賃金が上がれば、それにつられて食べ物の値段も上がる」とも話す。

Evergreen社横の広場で商いをしている Moun Sam Engさんは、毎日160食を売り切っていると言う。「この仕事を始めてから、この場所代として280ドルを払いました」と述べ、この場所を利用するために毎月10ドルを支払っていると言う。1,500リエルの豚肉とご飯セットも販売しているが、500リエル以上の食べ物の売れ行きは芳しくない。

Evergreen社の人事部 Sar Rithy氏は、「我々は、労働者にもう少し食事や衛生面に気を使って欲しいとは思っているのですが」と話す。また Rithy氏は、「露天商より値上げの相談を受けたので、その提案を我々はチームリーダーや労働組合とも話し合いました。その結果、露天商たちに対して、同じ価格で販売するよう依頼しました」と話した。露天商の Mey Seounさん(48)は、縫製業の労働者は5月より給与が上がるが、それに伴う利益を受けられる機会が無いことに憤り、「私は値段を上げることができません……。私は、提供する食事の量を少し減らそうと考えています」と述べた。

2. 4/26、Hung Wah I 工場にてストライキ

Hung Wah I 縫製工場で働く2000人以上の労働者が Por Sen Chey 工場周辺で抗議活動を行なった。理由は、会社を辞める労働者への年功加俸の支払を会社側が拒んだことにある。Hung Wah I 社の自由労働組合代表 Touch

Sar 氏は、「社会問題相により設けられた昨日の組合側と会社側の交渉では、特に何も得られるものがなかった」と話している。「私たちが求めているのはひとつだけです。契約を終了した際に支払われるべきお金です。1 年に 150 ドルの年功加俸を私たちは望んでいますが、会社側が同意したのはほんの 20 ドルです。50~60 歳代の人たちも働いていますが、彼らはもうこれ以上働きたいとは思っていません。そのため、仕事を辞める際にお金を支払ってほしいのです」と彼は話す。

「5 年以上働いている労働者もたくさんいます。しかし会社から契約書を受け取っていない労働者が多数おり、彼らの行く末は不安定な状況となっけてしまっています。労働者の要求が満たされるまでは抗議活動を継続する予定です」と話している。Hung Wah I 社のマネージャーからのコメントはまだない。

3. 4/30、D&L Ultimat 工場にてストライキ

プノンペンの D&L Ultimate 工場において、300 人以上の縫製業労働者が抗議活動を行なった。彼らの要求は、工場内で新しく組織した労働組合の新リーダーに選ばれた労働者の復職である。カンボジアアパレル労働者組合連盟の職員である Suth Seam 氏の話によると、Dangkor 地区にあるこの工場の労働者達はタイヤに火をつけてスピーカーで大音量の音楽を流し、ダンスをしたり大声をあげたりしていた。「私は何にも悪いことをしたわけじゃありません」と解雇された組合リーダーである Pen Sophal さんはポスト誌に昨日語った。工場は彼が労働者を抗議活動に導いたとして解雇したが、Pen Sophal さんの話では、彼自身そんなことをした覚えはなく、ただ労働者にもっとしかるべき権利を与えるべきだと記した書類を工場に提出しただけであるという。加えて「私は抗議活動をけしかけたことはありません」と話している。現在、労働者達は、「会社が彼を復職させ、他の労働条件が受け入れられるまでストライキを続ける予定でいる」と言う。また D&L Ultimate 社はコメントを拒否している。



4. 4/22、クメール語がグーグルで対応開始

Google が 4 月 19 日より翻訳サービスを行っているウェブサイト Google Translate において、クメール語の対応をスタートさせた。このサイトで取り扱われる言語は、クメール語で 66 カ国語目となり、アゼルバイジャン語やウルドゥー語といった他 11 の言語とともに取り扱い言語の仲間入りをした。プロダクトマネージャーの Divon Lan 氏は、この翻訳システムは英語で形成されているインターネット内の情報を理解したいと考えているカンボジア人や、クメール語に興味を持つ外国人などに広く利用されるだろうと話している。「翻訳機能はまだ初期段階の試作品であるため、翻訳の際にエラーが発生する可能性もありますが、文章は完成に近いレベルのもので利用者はだいたいの意味は掴むことができるでしょう。もっと多くの人々がこの機能を利用してくれば、システムの改善点も見えてきてより良く改善されていくはずですよ」と話した。

5. 4/22、邦人殺人の犯人逮捕

今年 3 月にプノンペンで日本国籍のキタムラコウセイさん(44 歳)を殺害した容疑で、In Sok Chheng(22 歳)と Pov Noch(28 歳)、そして 3 人目の男が逮捕され、Prey Sar 刑務所に送致された。プノンペンの裁判所は 3 人に対し違法武器使用、強盗、故意の殺人といった容疑をかけて、Prey Sar 刑務所にある代用監獄に送った。しかし他 2 人がいまだ逃走中であるようだ。

内務省の Internal Security Police Department に勤める Chhay Sinarith 氏は、In Sok Chheng(22)と Pov Noch(38)、そして名前の特定されていない 25 歳の男の 3 人は、日本国籍のキタムラコウセイさんを、ストリート 288 にある Maliya Apartment complex の正面で襲撃し、発砲したとしている。このアパートがある Boeung Keng Kang I は、普段はとても穏やかで静かな地域である。トクトクの運転手も負傷しているこの発砲事件は、3 月 3 日の早朝に起こったもので、キタムラさんが 4 つの弾丸を身体に受けて搬送中に死亡している。捜査の結果、警察は Meanchey 地区にある借家において 4 月 19 日容疑者たちを逮捕したが、犯行グループの残り 2 人は逃走した、と Sinarith 氏は話している。Chamkarmon 地区のある匿名の警察官は昨日ポスト誌に対して、キタムラさんは殺害される数時間前に NagaWorld のカジノでギャンブルをしていた、と証言している。容疑者たちはキタムラさんをカジノから自宅までつけていったのち襲撃し、ギャンブルで買ったお金や貴金属を奪ったものとされる。プノンペンの日本大使館は、逮捕に関して、「彼らは、武装強盗団に属しており互いに顔見知りです。以前にもプノンペンで武装強盗を働いたことがあります。3 人の容疑者の話によれば、事件に関与した犯人がまだあと 2 人いるということなので、警察官はその 2 人の逮捕に集中しているでしょう」と話している。容疑者を逮捕した警察官はバイクや携帯電話、銃弾の入ったピストル K59 型などを押収している。

6. 4/23、フン・セン首相、ブレアビヒア判決に自信

フン・セン首相は、オランダのハーグにある国際司法裁判所で審議されているブレアビヒア寺院問題に関して、カン

ボジア弁護団と他国の弁護士に対して、静粛かつ穏便に対応するようにと促した。「私はタイの Yingluck Shinawatra 首相と面会して、こう話しました。裁判の結果がどうなるかは問題ではない。カンボジアとタイの関係はまるで舌と歯のようなもので、決して敵国にはならない」と彼は話す。

Prey Veng 地区にある Serey Udom で行われた法要のなかで、首相は数百人もの村人に向かって、「4 日間にわたった審問は 2 つの主要ポイントに要約することができる。ひとつは、カンボジアは 1962 年の国際裁判では帰属がはっきりとしなかった寺院周辺の紛争地域に関して、寺院そのものに関しては国際司法裁判所がカンボジアのものであると一度決定しているが、今度こそはっきりとした判決を出してほしいと願っていたこと。もう一つは、カンボジアとタイは寺院のそばにある国境に沿った 4.6 四方キロメートルの土地を争っており、2008 年以降死傷者を出す衝突が何度か繰り返されている。今年中には国際司法裁判所が介入し抑制を行う予定である」と話した。

フン・セン首相は、国際私法裁判所が 1962 年の判決を再解釈するだろうと予測しており、その理由は暫定的に武装解除されている地域に関する判決を出さなくてはいけないからだとしている。さらに、フン・セン首相は、国際司法裁判所がタイとカンボジアの両国に対して、それぞれがどの地域を“寺院付近”という言葉の定義づけをしているかを尋ねた事を明かし、それは裁判所が両国の板挟みになっている状況をなんとかしようとしているからだと話した。カンボジアの使節団をハーグまで率いた外務省の Hor Namhong 氏は、昨日プノンペン国際空港に到着し、「タイの外務省職員 Surapong Tovichakchaikul 氏と会合を行い、互いに裁判所の判決に従うことに関して同意をした」と話している。

両国はこの問題に関して落ち着いて対処をしたいとアピールしているが、タイミングの悪いことにプノンペンでは 6 月に世界遺産委員会が行われる予定で、この会のなかでプリアビシア寺院のことも話題にのぼるだろうと予想される。国境で起こった 2008 年の武装衝突は、プリアビシア寺院が世界遺産に登録されたことが発端となっているのだ。

7. 4/29、カンボジアの輸出額が 20%増

今年最初の四半期におけるカンボジアの輸出額が、昨年同時期に比べて 21 パーセント増加したことを政府職員は明らかにしており、またこれはカンボジアの経済発展にとってとても良い兆候である、としている。ポスト誌が入手したカンボジア商務省の輸出データによると、今年最初の 3 ヶ月ですでに輸出額は計 16 億 5 千ドルを超えており、昨年同時期の 13 億 6 千ドルを大きく上回った。

8. 最近の外資の進出状況



①4/25、カンボジアで初の乳製品工場がプノンペン経済特区に参入

カンボジア初となる乳製品工場をプノンペンに建設するという計画がある。ベトナムを拠点とした乳製品工場の工場主たちは、この計画が乳製品に対する地元の需要を満たすことを期待している。ベトナムを拠点とする会社 Vinamilk の現地流通業者 BPC Trading に勤める Manoj Nuchanart 氏の話によると、プノンペン経済特区に建設予定のこの工場は敷地面積およそ 2.7 ヘクタールとなり、加糖練乳やヨーグルト、UHT 乳(超高温熱処理牛乳)を製造する予定であるようだ。

BPC Trading と Vinamilk は、工場設立のための新会社 Khmer Dairy Products を通して共に事業を行っていくための合併事業計画に来月サインをする予定でいる。「この会社の 51%は Vinamilk に保有されることとなり、来年末には工場での生産をスタートできるでしょう。我々は Vinamilk 社の製品をもう長いことカンボジアで販売しています。よく売れているので、ここに工場を建てたらいいのではと考えました」と Manoj 氏は述べている。Vinamilk のチェアマンである Mai Kieu Lien 氏の話では、会社がカンボジアに輸出している乳製品の総額は毎年 4000 万～5000 万ドルにまで上っているという。新工場建設にかかる費用や製品の生産量などに関しては明らかにしていないが、BPC Trading と Vinamilk はカンボジア開発評議会からの承認を待っている中、すでに経済特区内の土地借用費用 50 年間分を支払っているという。

②5/10、かつら大手のアートネイチャーは、カンボジア首都プノンペンに生産子会社「アートネイチャー・カンボジア」を、同社の全額出資で設立すると発表。資本金は50万ドルで、9月設立の予定。アートネイチャーは、「事業拡大に向け、フィリピンでの一国集中生産によるリスクの軽減と、製造原価の低減が目的」としている。同社は昨年12月、東南アジア市場の開拓を目指し、中国・上海市に続く海外拠点として、シンガポールに販売子会社を設立した。

③5/10、中国の床板加工会社の大連科冕木業(遼寧省庄河市)は、カンボジアで木材の加工事業を行うことを決定。現地で調達する原木を中国にも輸入する計画。資本金は500万米ドル。

以上

【中国経済最新統計】

	① 実 質 GDP 増加率 (%)	② 工 業 付 加 価 値 増加率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加 率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億 ^{ドル})	⑦ 輸 出 増加率 (%)	⑧ 輸 入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加 率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005 年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006 年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007 年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008 年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
2009 年	9.1	11.0	15.5	1.9	31.0	1961	▲15.9	▲11.3	▲14.9	▲16.9	27.6	31.7
2010 年	10.3	15.7	18.4	3.3	24.5	1831	31.3	38.7	16.9	17.4	19.7	19.8
12 月	9.8	13.5	19.1	4.6	20.4	131	17.9	25.6	9.2	-13.3	19.7	19.9
2011 年	9.2											
1 月			19.9	4.9	23.7	65	37.7	51.4	16.6	11.4	17.3	16.9
2 月		14.9	11.6	4.9	—	-73	2.3	19.7	-10.9	32.2	15.7	16.2
3 月	9.7	14.8	17.4	5.4	31.2	1	35.8	27.4	10.5	32.9	16.6	16.2
4 月		13.4	17.1	5.3	37.2	114	29.8	22.0	8.2	15.2	15.4	15.8
5 月		13.3	16.9	5.5	33.6	130	19.3	28.4	12.1	13.4	15.1	15.4
6 月	9.5	15.1	17.7	6.4	11.8	223	17.9	19.0	6.6	2.8	15.9	15.2
7 月		14.0	17.2	6.5	27.7	315	20.3	23.0	2.7	19.8	14.7	15.0
8 月		13.5	17.0	6.2	33.4	178	24.4	30.4	6.4	11.1	13.6	14.8
9 月	9.1	13.8	17.7	6.1	27.3	145	17.0	21.1	-3.5	7.9	13.1	14.3
10 月		13.2	17.2	5.5	34.1	170	15.8	29.1	-0.6	8.7	16.7	14.1
11 月		12.4	17.3	4.2	21.4	145	13.8	22.6	-12.9	-9.8	16.2	14.0
12 月	8.9	12.8	18.1	4.1	5.7	165	13.3	12.1	-15.4	-12.7	17.3	14.3
2012 年												
1 月				4.5	25.3	273	-0.5	-15.0	4.6	10.8	16.6	14.8
2 月		21.3		3.2	—	-315	18.3	40.3	38.7	-0.9	17.8	15.0
3 月	8.1	11.9	15.2	3.6	21.1	53	8.8	5.4	-6.5	-6.1	18.1	15.7
4 月		9.3	14.1	3.4	19.2	184	4.9	0.4	-26.1	-0.7	17.5	15.4
5 月		9.6	13.8	3.0	21.0	187	15.3	12.7	-6.1	0.0	17.9	15.7
6 月	7.6	9.5	13.7	2.2	21.8	317	11.3	6.3	-16.3	-6.9	18.5	16.0
7 月		9.2	13.1	1.8	20.6	251	1.0	5.7	-7.8	-8.6	18.9	16.0
8 月		8.9	13.2	2.0	19.4	267	2.7	-2.7	-12.7	-1.4	18.4	16.1
9 月	7.4	9.2	14.2	1.9	23.1	277	9.8	2.3	-6.4	-6.8	19.8	16.2
10 月		9.6	14.5	1.7	22.4	320	11.5	2.2	1.8	-0.2	14.6	15.9
11 月		10.1	14.9	2.0	20.0	196	2.8	-0.1	-8.7	-5.4	14.5	15.7
12 月	7.9	10.3	15.2	2.5	18.8	316	14.0	6.0	-7.8	-4.5	14.4	15.0
2013 年												
1 月				2.0	20.8	291	25.0	29.0	-12.4	-3.4	15.9	15.4
2 月				3.2		153	21.7	-14.9	-35.6	6.3	15.2	15.1
3 月	7.7	8.9	12.6	2.1	21.5	-9	10.0	14.2	-19.7	5.7	15.7	14.9
4 月		9.3	12.8	2.4	19.8	182	14.6	16.6	13.9	0.4	16.1	14.9

注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。
2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1 月と 2 月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、() 内の数字は 1 月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。
3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の 86%（2007 年）を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。
出所：①—⑤は国家统计局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。